

最優秀賞

将来の自分に向けて



石神中学校 三年

清 信 晴 音



「学校が嫌いだ。」いつしか僕は、こんなことを思うようになりました。

六年生の頃、僕は中学校生活を何よりも楽しみにしていました。みんなで協力し、優勝を目指して一生懸命練習に取り組む部活動。小学校よりもクラスの人数も増え、友達と笑い合い、時には共に泣くこともあったり、そんな楽しい日々が待っているのだと思っていました。しかし、僕を待っていたのは、想像していたものとは違った学校生活でした。大したやる気もなく、言われた通りの練習しかしない部活動、会話についていくことすらままならない友人関係。僕の期待していたものがまた減ってしまうように思えました。さらに勉強もこれまでとは比べものにならないほ

ど難しくなり、学校というものに裏切られたような不安を感じました。それでも、いつかはよくなると未来の自分に期待していました。でも、または現実には甘くはなく、心を許せるような友達と出会うこともできず、部活動も本気で取り組むことができませんでした。

そして、僕はだんだんクラスの人達の話に入り込むことができなくなり、人と会話することに自信を失いました。それからというものの意識しないうちに人とのコミュニケーションを避けるようになってしまいました。そして、クラスの中でも少し浮いているような存在となりました。休み時間もほとんど読書することが多くなり、一人で過ごす時間が増えていきました。その時の僕は、全てがマイナス思

考でした。

「何をやってもきつとだめだ。どうせうまくいかない。頑張るだけ時間の無駄だ。」

と考えてしまいました。その時、ある本を読んだことよって生き方を学ぶことができました。その本の主人公は、全て普通で大した特徴もない平凡な人間でした。その人は、他人に関心がなく、自分がよければいいというような考え方を持つ人でした。僕は、最初はそれはただの自分勝手に傲慢な人物だと思っていました。彼の言った言葉で心に響いたものがありました。それは、

「最低限の努力もしない人物に、努力している人の気持ちはわからない。」

という言葉でした。この言葉から今の自分は、環境に慣れようと努力もしないで言い訳だけをして現実から逃げようとしている姿に見えました。僕は今まで何をやってきたのだろうか、何を考えていたのかと強く胸を突かれた思いでした。それからは、人とのコミュニケーションがとれるよう努力しました。家では、対人会話のコツや話している内容を盛り上げる方法を覚え、学校では、挨拶を明るく元気にするように心がけ、良い印象を与えられるよう頑張りました。初めは、うまく相手と話すことができませんで

した。しかし、会話を重ねるたびに感覚でうまく話題を繋げられるようになり、周りからは、明るい印象になったと言われるようになりました。それからは、だんだん自分に自信がもてるようになってきました。また、勉強や部活動も両立でき、充実した学校生活を送られるようになりました。

今では、生徒会長に就き、毎日「朝のあいさつ運動」をはじめ、他の生徒会役員のみならずと学校がさらにより良い場所になるよう活動に励んでいます。

一冊の本の中の主人公のあの「言葉」のおかげで僕は、自分を見つめ直すことができ、自分の可能性を見出すことができました。三年生になってから、受験へ向けての日々の勉強や生徒会活動も大変になってきましたが、諦めないで努力をしていきたいです。それでも辛くなって逃げ出しなくなるような時にはあの「言葉」を思い出し、自分を信じて一步一步前を向いて更に新たな自分に挑戦していこうと考えています。そして、将来自分も社会に貢献できるような人になりたいです。